

「エリヤが来る」

マルコの福音書 9:9～13

はじめに

今回はイエシュアが、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れ、とある高い山に登られました。そこでイエシュアの御姿が変わり、エリヤとモーセが表れ、「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」という父なる神の御声とともに、雲に包まれたという出来事でした。これはやがて起こるイエシュアの空中再臨、教会の携挙を表した「型」であると述べました。それはすなわち以下の預言の成就です。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

ここにある「キリストにある死者」がモーセに、また「生き残っている私たち」がエリヤの存在にそれぞれ表されていると考えられ、「号令と御使いのかしら」である父なる神の御声、文字通り雲に包まれる様子など、イエシュアが表されたこの高い山での出来事は、まさにイエシュアの空中再臨、教会の携挙を表した「型」であると言えます。それが「変貌山の奇蹟」と呼ばれるこの出来事に表された神のご計画であると考えられます。そして今日の内容はその続きになります。この驚くべき光景を目の当たりにしたペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子たちは、様々な思いをめぐらせながら、イエシュアとともにこの高い山から下りて行きます。

1. 山を下りながら

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:9 さて、山を下りながら、イエスは弟子たちに、人の子が死人の中からよみがえる時までには、今見たことをだれにも話してはならない、と命じられた。

ここでイエシュアは弟子たちに「山を下りながら…命じられた」とあります。山に登られたのだから下りるのはあたりまえ、これは単なる状況説明で、特に目をとめる必要はない、と解釈することもできます。ではこの記述は書いても書かなくてもどちらでも良いようなものなのでしょうか。神の御言葉である聖書に、そのような意味のない無駄な記述が存在するのでしょうか。私の見解、信仰としてそれは否です。聖書に無意味な記述など存在しません。確かに訳された言葉ではそうであったとしても、聖書の原語であるヘブル語で解釈するならば、聖書のあらゆる記述、特にイエシュアの公生涯が記録されたこの福音書においては、どんな小さな記述にも意味があり、いやむしろ神のご性質からしてこのような些細な記述、人の目にとまりにくいような箇所こそ、神はその偉大なご計画を秘めておられると考えるべきです。では見

てまいりましょう。ここに使われている「(山を) 下りる」という意味で使われているヘブル語ヤーラド(𐤃𐤓𐤁)は本来、以下のような出来事で使われました。

創世記【新改訳 2017】

11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

これは有名なバベルの塔についての記述です。バベルの人々は天に届く塔を建て、神のようになろうとしました。そんな人々をご覧になるために、神である主は「降りて来られた」とあり、ここに聖書で最初のヤーラドがあります。神は天からヤーラド、降りて来られ、そしてこのバベルの塔の計画を中止させました。ですからヤーラドとは本来、**神がご自分に敵対する者の企てをやめさせる、打ち壊すために天から降りて来られる**という意味を持った言葉であると考えられ、そしてこのバベルの塔の出来事はやがて世の終わりに神の御子メシアであるイエシュアが地上に再臨され、ご自分に敵対する獣、反キリストの帝国を滅ぼされるという神のご計画を表す「型」であると考えられます。つまりイエシュアが弟子たちを連れて「山を下りながら…命じられた」というこの様子には、イエシュアの地上再臨の「型」が表されていると考えられます。前回の箇所、エリヤとモーセとともにイエシュアの空中再臨、携拳の「型」を表されたイエシュアは、その次に起こる神のご計画としてこの地上再臨の出来事をここで表しておられるのだと考えられます。ちなみにここで「命じられた」と訳されている箇所のヘブル語ザーハル(𐤆𐤇𐤁)には他に「輝く」という意味もあり、前回の箇所、イエシュアの御姿が変わり、その衣が白く「輝いた」ことが記されていましたが、そこにも同じくこのザーハルが使われており、この事実からイエシュアが神の栄光を帯びて天から降りて来られる、空中再臨と地上再臨という二つの出来事の結びつきを見ることができます。まさにこう記されているとおりです。

Ⅱテサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

2:8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。

「(来臨の) 輝き」ここに使われているヘブル語はヤーファ(𐤃𐤓𐤁)「光を放つ、輝く」という、ザーハルと同様の意味を持つ言葉です。終わりの日、地上に再臨されるイエシュアはこの「来臨の輝き」をもって、かつてバベルの塔の計画を打ち壊されたように、獣と呼ばれる反キリストの計画を打ち壊し、これを滅ぼされます。このように、イエシュアの地上再臨という神のご計画は、ただ単に神がこの地に来てくださる、というだけのものではなく、**この世を支配している悪魔、神の敵対者であるサタンとそれに従うすべてのものを打ち滅ぼし、あるいはこの地上から追い出す**という目的を持っているのです。

イエシュアの空中再臨、そして地上再臨。この二つのご計画が成就するためには、いくつかの条件が必要で、その最も重要なものが、イエシュアがイスラエルとそれにつながる異邦人、すなわち教会の罪の贖いとして死なれ、そしてよみがえられ、天に上られるということです。これが果たされない限り、上記の

二つの出来事は成し得ません。なぜなら、罪の贖い、罪の赦しなしに誰も救われることはなく、また先ほどのヤーラドに表されていたように、再臨とは天から降りて来ることであり、そのためにイエシュアが天に上ることなくして、天から降りて来るということはないからです。イエシュアは弟子たちに「**人の子が死人の中からよみがえる時までは、今見たことをだれにも話してはならない**」と命じられましたが、この時点ではまだこれら二つの再臨が起こるための重要な条件が満たされていなかったために、このように命じられたのだとも考えられます。

2. 胸に納める

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:10 彼らはこのことばを胸に納め、死人の中からよみがえると言われたのはどういう意味か、互いに論じ合った。

前節の「**山を下りながら…命じられた**」イエシュアには、イエシュアの地上再臨の「型」が表されていると述べました。それはすなわち、この地上のすべての悪を滅ぼされる御方としてのイエシュアでした。それを受けての弟子たちのこの様子にも、同様に神のご計画が表されていると考えられます。つまりイエシュアが地上再臨された際の弟子たち、すなわち神に聞き従う、イエシュアをメシアとして信じ受け入れた者たちの様子、状態の「型」が表されているということです。ここで弟子たちはイエシュアの「**ことばを胸に納め…互いに論じ合った**」とあります。「**胸に納める**」と訳された箇所にはシャーマル(רמץ)というヘブル語が使われており、この言葉は初め、以下の箇所使われました。

創世記【新改訳 2017】

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

かつて神がこの地上に築かれた楽園、理想郷「エデン」。そこを「守らせた」という箇所に聖書で最初のシャーマルがあります。神のご計画の完成である「御国、神の国」とはまさにこのエデンに集約されており、神と人がともに住まうその世界を復興し、そこに再び「園」を設け、神とともに生きる、すなわち神の御言葉に聞き従う人々によってこれをシャーマル、守らせる、治めさせることが最終的、究極的な神の御心、み旨、目的なのです。ですから「**ことばを胸に納め**」たという弟子たちについての記述には、「**神の国**」において、御言葉に聞き従い、その御国を守り、治めていく「**神の民**」としての、回復されたイスラエルの民とまたそれにつながる異邦人すなわち私たち教会の姿が「型」として表されていると考えられます。

また弟子たちは「**互いに論じ合った**」ともありますが、ここには「尋ね求める」という意味のダーラシュ(דרש)が使われており、この最初の言及は以下の箇所になります。

創世記【新改訳 2017】

9:5 わたしは、あなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。いかなる獣にも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。

9:6 人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。

9:7 あなたがたは生めよ。増えよ。地に群がり、地に増えよ。」

これは神が大洪水による滅びを免れたノアに語られたものです。神は「あなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する」と語られ、この「要求する」と訳されたのが聖書で最初のダーラシュです。「あなたがたのいのちのため」、神の言われるいのちとは、やがて死ぬいのちではなく、永遠に生きるいのちです。つまり人が永遠に生きるために、神はその人の「血の価を要求する」のです。しかし人の血の価、その価値はきわめて高価です。人のいのちに対して、いかなる獣の血をもってしても賄いきれるものではありません。なぜなら「神は人を神のかたちとして造ったから」です。ただ神の御子メシアであるイエシュアの血だけがそれを賄う、償う、贖うことができます。ですから弟子たちが「互いに論じ合った」という箇所に使われているダーラシュには、イエシュアの血、すなわちイエシュアの十字架の死が要求されており、その血の代価によって罪赦された人、神の言われるいのち、永遠のいのちによって生かされる人の姿が表されていると考えられます。エデンの回復である「神の国」の、その民「神の民」とは、「互いに」すなわち誰もがみなすべて、このダーラシュの本来の意味に表された、イエシュアの血によって贖われた者たちであり、永遠に生きる者たちであることがここには表されていると考えられます。人が「神の国」において永遠に生きること、それが聖書の指し示す、神がお与えになるただ一つの救いです。これ以外に救いはありません。そしてイエシュアの血の代価によってしかこの救いは与えられません。まさにこう記されているとおりです。

使徒の働き【新改訳 2017】

4:10 …あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

このように、人はイエシュアによって救われるのですが、正確には「十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人」神の御子メシアであるイエシュアによって救われるのです。その事実が「互いに論じ合った」という、この時の弟子たちの姿には表されていたと考えられます。

3. エリヤが来る

9:11 また弟子たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っているのですか。」

「まずエリヤが来る」この意味を理解するにはまず以下の預言を知る必要があります。

マラキ書【新改訳 2017】

4:1 「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。——万軍の【主】は言われる——

4:2 しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。

4:3 あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行う日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。——万軍の【主】は言われる。

4:4 あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を覚えよ。それは、ホレブでイスラエル全体のために、わたしが彼に命じた掟と定めである。

4:5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。

4:6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」

「見よ、その日が来る。」という冒頭から始まる、世の終わりを指し示すこの預言の中に「見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす」とあり、「まずエリヤが来る」とは、この預言の成就を指し示すものであると考えられます。預言者マラキによるこの預言は、「高ぶる者、悪を行う者、悪者ども」と「あなたがた、わたしの名を恐れる者」たちに対するそれぞれ異なる対照的な結末を示した内容の預言が、同時に語られたものとなっています。それはすなわち神に聞き従わず、敵対するものに対する滅びと、神を恐れ、その御言葉に聞き従う者に対する救いのご計画です。これを神の裁きと言います。神が来られる、イエシュアが地上に再臨されるのは、この地を裁くためです。それがここまでの文脈から導き出される「まずエリヤが来る」という御言葉についての一つの解釈です。つまり今日の箇所最初のマルコ 9:9 で、イエシュアが弟子たちを連れて「山を下りながら…命じられた」というこの様子には、神に敵対するものたちの企てを打ち壊すためのイエシュアの地上再臨の一側面が表され、続く 9:10 での弟子たちがイエシュアの「ことばを胸に納め…互いに論じ合った」という姿には、「神の国」がこの地に建てられ、「神の民」がそれを守り、また治めるためのイエシュアの地上再臨のもう一つの側面、目的が表されていたということです。この解釈と上記のマラキの預言とは、内容が見事に合致します。

ですからこのエリヤが一体誰で、何者であるかということよりも、「まずエリヤが来る」という御言葉が指し示すこの預言に表された、神の裁きというご計画に目をとめることこそが重要であると考えます。そのように考えるならば、次の「エリヤがまず来て、すべてを立て直すのです。」というイエシュアのこの御言葉は、上記のマラキの預言に記された神の裁きが成就し、それによってこの地上の「すべてを立て直す」ということが神のご計画であると語られていると考えられます。

4. 立て直す

9:12 イエスは彼らに言われた。「エリヤがまず来て、すべてを立て直すのです。それではどうして、人の子について、多くの苦しみを受け、蔑まれると書いてあるのですか。」

9:13 わたしはあなたがたに言います。エリヤはもう来ています。そして人々は、彼について書かれているとおり、彼に好き勝手なことをしました。」

ここで「立て直す」と訳されているヘブル語シューヴ(שוב)は本来、「土に帰る、塵になる」(創世記 3:19)という意味で使われており、それはかつて人(アダム)がエデンの園を守るために、土の塵から取られた、造られた時の状態に戻るということであり、そして人は新しく造られ、再びエデンの園に置かれるという神のご計画が表されていると考えられ、ここにも神のご計画の完成である「神の国」がエデンの回復であ

ることが指し示されていると考えられます。このように、ここまで語ればこのエリヤがもはやただの人ではなく、創造主なる神であり、その神が人となられた御方であるイエシュアご自身を指し示していることは明らかです。しかしある解釈では、このエリヤはバプテスマのヨハネだとするものがありますが、このマルコの福音書に関しては、文脈上彼の存在は認められず、彼を指し示すような記述もこの前後に見当たりません。またその他に、世の終わりに登場するというヨハネの黙示録に記された二人の証人、預言者（ヨハネの黙示録 11:3）の一人だという解釈もあります。しかしこのエリヤは「**律法学者たちは…言っている**」エリヤ、つまり旧約聖書に示されたエリヤです。この時代にはまだヨハネの黙示録は存在せず、当時の律法学者たちはこれを知る由もありません。またもしそうであったとしても、預言者とは本来、みな神の御言葉の代弁者ですから、いずれにせよ究極的には生ける神の御言葉であり、その体現者、完成者であるイエシュアを指し示すこととなります。ですからイエシュアはご自分を指して「**エリヤはもう来ています**」と言われ、そしてその目的が、ご自分が「**多くの苦しみを受け、蔑まれる**」こと、また「**人々は…好き勝手なことを**」イエシュアに対して行うこと、すなわちイエシュアを十字架につけて殺すことをここで言い表されたのだと考えられます。

5. エリヤはもう来ています

「**エリヤはもう来ています。**」それはつまり、イエシュアの十字架の死によって流された血の、その代価によって罪が赦される、救われるという仕組み、手立てが整った、すでに完成したということです。一方滅びの道は、エデンの園で人、アダムとエバが神に聞き従わず、罪を犯したその時にすでに定まっていました。イエシュアの血、その死によって贖われる、救われることを信じない、求めない者はみな、まさに「**好き勝手なことをし**」続け、やがて滅びに至ります。

このように、今日の箇所には神の裁き、神による救いと、そして滅びが対比され、人はどのようにして救われ、またどのようにして滅びるのかということが表され、その両方が成就、実現することが神のご計画であることが表されていると考えられます。そして神の裁きは、神の御子メシアであるイエシュアが再びこの地上に来られる時に成就します。つまり人はみなイエシュアによって救われ、あるいはイエシュアによって滅ぼされるということです。聖書が示すとおり、イエシュアは来られました。そしてやがて再び来られます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

22:21 主イエスの恵みが、すべての者ととともにありますように。